

世界の労働関係研究所・資料館・ 図書館(5)

コーネル大学産業・労使関係学部カサーウッド図書館と
キールセンター

五十嵐 仁

はじめに

2001年6月19～21日、私はニューヨーク州のイサカという町を訪問した。以前、労使関係についての外書を読んだとき、出版社の名前の後にIthacaとあった。「これは何だろう」と思ったものだが、地名だとは気が付かなかった。しかし、今はもうはっきりと分かる。コーネル大学出版部のある場所のことである。

イサカはコーネル大学Cornell University⁽¹⁾のある風光明媚な学園都市である。ここにやってきたのは、コーネル大学の産業・労使関係学部(School of Industrial and Labor Relations, ILR⁽²⁾)、労働関係資料のあるカサーウッド図書館、労使関係文書が保管されているキール・センターなどを見学するためだった。

今回は、ホテルでの宿泊ではなく自宅に泊めていただくことになっていたもので、これも楽しみだ。コーネル大学からライシャワー研究所にいられていたブレット・ド・バリーBlett de

Bary⁽³⁾さんに相談したところ、「それなら、私の所に泊まりなさい」と仰っていただいたからだ。

これは、アメリカの一般家庭の片鱗を垣間見るチャンスでもある。とはいえ、泊めていただくのは大学の教員なので「一般家庭」とは言えないかもしれないが……。

イサカとド・バリー邸

コーネル大学のあるイサカには、ニューヨーク市を經由して往復バスで行った。しかも、片道10時間もかかるバスの旅である。飛行機で行けないこともないが、料金が圧倒的に違う。それに、アメリカの田舎を見る良い機会でもあるということで、バスの旅を選択した。

かつて1989年に中国を旅したとき、シーサンパンナ景江から昆明まで片道3日間の路線バスの旅というのを経験したことがある。しかも、舗装していない道路での……。これに比べれば今回のバスの旅はそれほどハードなものではな

(1) コーネル大学のHPについては、<http://www.cornell.edu/>を参照。

(2) コーネル大学の産業・労使関係学部について、詳しくは<http://www.ilr.cornell.edu/>を参照。

(3) ド・バリーさんは、コーネル大学アジア学部、比較文学部教授で、日本近代文学、戦後文学、ファシズム、映画評論などを専門にしている。『ナショナリティの脱構築』(柏書房、1996年)という本の編者の一人で、柄谷行人『日本近代文学の起源』の英訳なども行っている。

い。

泊めていただいた家は、家というよりはすごい邸宅で、今は大学を卒業して家を出た息子さんの部屋を使わせていただいた。この家はArts and Crafts Styleの家で、グスタフ・スティックレーGustav Stickleyの設計になるものだという。この人は、1876年から1916年に展開された「Arts and Crafts」運動の代表的な建築家で、家具のデザインや製造販売も手がけていた。この近くのシラクサSyracuseの町には、彼のデザインを踏襲する家具製造工場があり、この家の家具はそこから購入したものだ。

スティックレーについての本⁽⁴⁾を見せていただいたが、その本の124頁にこの家の写真がでていてビックリした。次の125頁には設計図も掲載されているが、その2階の東南の角の部屋が、私が泊まった部屋である。

スティックレーは日本の農家の影響を受けていたそうで、木の地肌を生かした素朴な味わいの家を多く設計したという。私がこの家について山小屋のような「洋館」だという印象を持ったのも、木組みを生かした和洋折衷の雰囲気か漂っていたからだろう。



スティックレーの設計したド・バリー邸

コーネル大学のある町イサカは、一番低いところに湖があり、その周りをいくつかの丘が囲

んでいるため坂が多い。ここにある湖は、地元ではfive fingersと呼んでいる。細長い湖が5つ、指のように並んでいるからだ。この湖は、その昔、氷河によって土地が削られてできたもので、そのために細長い形をしている。

コーネル大学

ピーピー、ピヨピヨという鳥の声で目が覚めた。キーキーという鳴き声や、時折、カーカーというカラスのような声も聞こえてくる。窓を開けると、スーッと朝の清々しい空気が入ってきた。外を見たら葉の生い茂った木々以外、何もない。緑一色である。梢の向こうには青空が広がっている。

朝食を済ませてから、大学に案内していただいた。歩いて20分ほどの距離だから、近いものだ。途中、渓谷の上の吊り橋のような所を渡った。「あそこに瀧があります」と言われて横の方を見ると、確かに小さな瀧がある。山道風の木の階段を上ると、そこはもう大学のキャンパスである。緑の芝生に覆われた大きなキャンパスが広がっている。

キャンパスは高台にあり、まるで公園のようだ。アメリカでは、どこの大学に行っても、公園のように見えてしまうほど広く、緑豊かで綺麗に整備されているが、ここは特に眺めがいいように思う。遠くに湖が見える。反対側にもなだらかな丘が見え、とても素晴らしい景色だ。

コーネル大学はエズラ・コーネルEzra Cornellが「誰でも、何でも学べるような大学」を理想に、1865年に設立した大学である。コーネルはモールの仲間の発明家の一人で、電関係の発明で蓄えた私財を投じてこの大学を作った。それもあって、情報通信技術分野が充実している。

(4) Marry ann Smith, "Gustav Stickley: The Craftsman", Syracuse University Press, 1983.

オーリン図書館Olin Libraryの貴重書書庫の中で、このエズラ・コーネルの名前の入った金庫を見たが、いくらでも大金の入りそうな大きなものだった。この大学を作る資金も、この金庫から支出されたのだろうか。

コーネルは、この地方出身で農業に関心があり、農学関係の学部が沢山あるそうだ。そのため、最近では農業技術を学ぶために多くの留学生が途上国からやってくるという。

また、彼はリベラルで進歩的な考えをもっており、その影響は今も残っている。全米の中でも女子学生の入学を認めたのは早く、女性研究やアフリカ系アメリカ人についての研究も盛んで、今日ではゲイやレスビアン研究も行われている。

このような環境の中で産業・労使関係学部(ILR)も設置され、今日に至るもこの種の学部としては全米で唯一のものとなっている。しかもこの大学は、第2次世界大戦中の1944年に構想され、戦後の1946年に設立されたそうだから、アメリカの底力の大きさを思い知らされる。

もう一つ私の興味を引いたのは、この大学では私立と公立の単科大学(学部)が混ざり合っているという点だ。UniversityがCollegeやSchoolの結合体であることは知っていたが、これらが公立であったり私立であったりと、性格の異なるものが混在しているというのには驚いた。

公立はニューヨーク州立で、ニューヨーク州の住民は学費が安くなるという。その他の公立の学生でも、私立の学生よりはかなり安いそうだ。これらの異なる学費を払っている学生が同

じ大学で授業を受けているというわけだから、私などにはよく理解できない。

カサーウッド図書館

さて、私たちがまず訪れたのは、ILRのカサーウッド図書館Martin P. Catherwood Library⁽⁵⁾である。ILRの建物は大変モダンなもので、中庭を囲むようにして建物が建っている。

下の写真の像の左側下の方に見えるところが中庭への入り口だ。図書館は中庭を突っ切って行った右側になる。



ILRの建物の入り口

カサーウッド図書館では、Directorの肩書きを持つゴードン・ローGordon T. Law, Jr.さんが私たちを待ち受けていた。まず、ローさんから図書館の沿革についての話を聞き、中を案内していただいた。ここは現在改修中で、半分ほどは完了しているが、工事はまだ続いている。これは12月に終わるそうで、その際には書庫は2倍、閲覧室は3倍になるという。大変羨ましい話だ。

次の写真は、工事が終了した部分である。先ほどの写真の左側に当たる。

(5) カサーウッド図書館について、詳しくは<http://www.ilr.cornell.edu/library/>を参照。



工事が終了した部分のILR

書庫の中は移動書架になっていて、現在閲覧室として使われている部屋も工事が終われば書庫になるという。床を見たら、すでに移動書架用のレールが引かれていた。

書庫は書籍部分と資料部分とに分かれていて、書籍部門には20万冊の図書やパンフレット、4000点の逐次刊行物や新聞が収蔵されている。おもに、雇用問題、集団交渉、人的資源管理、労使関係の国際比較、労働経済、労働史と労働運動史、労働法関連などの分野のものである。

他方、資料部分には、すでにお馴染みになった蓋付きのダンボール箱やファイルがビッシリと並んでいる。案内していただいたブレットさんの時間があまりなく、キール・センターには午後改めて私だけで来ることにして、次の目的地に向かうことにした。

ローさんは、アメリカの三大労働資料館として、このカサーウッド図書館とウェイン州立大学のルーサー図書館、それにメリーランド州のジョージ・ミーニー・センターの名前を挙げた。このうちの2カ所はすでに訪れたので、今回の訪問で米三大労働資料館は、全て訪問したことになる。

ローさんは、海外ではアムステルダムの国際社会史研究所とドイツのエーベルト財団研究所の名前を挙げた。ここも、秋以降のヨーロッパ旅行の中で訪問することになる。



案内してくださったローさん

オーリン図書館とグリフィス・コレクション

次に向かったのは、オーリン図書館のアジア関係部門である。道路を挟んでもう一つウリス図書館Uris Libraryというのもあるが、前者は主として大学院生向けの専門書を所蔵し、後者は学部生向けの一般書が多いようだ。



アジア関係部門が入っているオーリン図書館

ウリス図書館の横にはテラスのような所があって、そこからの眺めも絶景だ。そこにいた時、ウリス図書館の横にある時計塔の時報が鳴った。時計を見ると12時ちょうどである。続いて、カリヨンの演奏が始まった。

カリヨンというのは鐘を叩いて演奏するもので、塔の上で専門の係の人が演奏しているのだそうだ。カリヨンはオランダやベルギーが代表的だが、アメリカにも沢山あるという。

オーリン図書館の東アジア部門にあたるワッソン東亜図書館Wason Collection on East Asiaでは、フレデリック・コータスFrederic KotasさんというPh.D.を持つ日本図書収集管理責任者の方にお会いした。ハーバード大学現代日本研究資料センターの坂口さんから名前を聞いていた方だ。早稲田の古本屋などとも連絡を取りながら大変意欲的に日本関係の文献を集めていて、英語だけでなく日本語の文献も、古代から現代まで全てを網羅したいと言っていた。最近では、日本映画のビデオなども収集しているそうだ。

この図書館の貴重書庫の中で、珍しいコレクションに巡りあった。それは、グリフィス・コレクションである。このコレクションは、ウィリアム・E. グリフィスWilliam Elliot Griffisが持ち帰った文献や資料類で、江戸時代から明治初めにかけての貴重な資料が集められている。私は、江戸時代に出された版本の『平家物語』と『義経記』を見せていただいた。

このグリフィスという人は、1870年来日して福井藩の藩校で物理学や化学を教えたそうだ。この時、廃藩置県前の福井城に住んだよう

で、お城に住んだ唯一の外国人だという説明があった。

彼の来日は、ラトガース大学に留学した日下部太郎の縁だった⁽⁶⁾。福井藩出身だった日下部のすばらしい人格と勤勉ぶり、才能に驚嘆して日本に興味を持ち、福井藩主・松平春嶽に招かれて来日する⁽⁷⁾。

グリフィスは1874年に日本を離れるが、この間、精力的に日本の歴史や風俗について研究を続けた。帰国後牧師となり、自らの体験を元に『皇国』『ミカド』などの本を著し、アメリカにおける「日本学」の先駆者となる⁽⁸⁾。

これらについて、私はほとんど何も知らず、このコレクションを目にして学んだわけである。このように、山の頂に立って一辺に視界が開けるような経験ができるのも、このような旅の面白さだ。「視野が広がる」というのは、このようなことを言うのだろう。

キール・センターと付属美術館

オーリン図書館で時間を食い、約束の時間はかなり遅れてしまったが、その後、再びカサーウッド図書館に戻って、キール・センター

(6) 日下部太郎の旧名は八木八十八で、1845年に福井城下で生まれた。14歳で藩主から賞状をうけるほどの秀才で、1865年、21歳のときに選ばれて英語修業のため長崎に留学、翌年、幕府が海外留学を認めると福井藩第1号の留学生として米国に渡る。このとき、日下部太郎と改名した。1年間の英語学習の後、1868年にニュージャージー州ニューブランズウィック市のラトガース大学に入学した。熊本の横井小楠の二人の甥がいて驚いたという。太郎は成績抜群であり、天才的数学者としてアメリカ・アカデミー賞の初代受賞者の一人となったが、学費の不足による苦しい生活と気候風土の違いにより結核にかかり、卒業を目前に病死した。ラトガース大学はその死を惜しみ、卒業生名簿にその名を加えたという。

(7) グリフィスの足跡は今も福井や金沢に残っている。福井市の春山小学校には墮涙碑(日下部太郎・グリフィス顕彰碑)があり、グリフィスが宿泊した異人館跡にも石碑がたっている。金沢の浅野川大橋のたもとには昔あった火の見櫓が再現されており、ここには1873年にグリフィスが撮影した写真があるそうだ。

(8) グリフィス・コレクションとしては、彼が日下部と出会ったラトガース大学のアレクサンダー図書館のものの方がよく知られている。このコレクションには、グリフィスの日記、教え子に書かせた作文、書簡、スクラップブック、パンフレットなどがあるという。グリフィスのコレクションの一部がなぜコーネル大学にあるのかについては聞き逃した。

Kheel Center⁽⁹⁾の中を見せていただいた。キールというのはセオドール W. キールTheodore W. Kheelのことで、ケネディ・ジョンソン時代に活躍した法律家で労働調停に当たった仲裁官だという。彼はまた、全国労使関係局の委員を経験したこともある。センターそのものは1949年に設立されていたが、彼にちなんでキール・センターと名付けられた。

ここには労働関係、労使関係の資料が収蔵されているが、キールの集めた資料もふくまれているので、労働争議や紛争の仲裁や調停に関するものも多く集まっている。労働組合でいえば、縫製労働者や鉄道などの交通関係、教育組合の資料が多いようだ。

このうち、縫製関係労働者（いわゆる「お針子」さん）が布を裁断するときに使っていたという、刀のように細長い「ナイフ」を見せてもらった。組合の年次大会の時の展示資料として貸し出したものだそうだ。

資料の分布は、地域で言えば、当然にも、ニューヨーク市を含むニューヨーク州の組合の資料が多くなっている。しかし、ニューヨークは経済の中心地であり、労働運動や政治運動も盛んな地域だから、そこで活動する組合の資料も、地域的というよりは全国的な意味を持つものが多くある。

またニューヨークには、世界各地からの移民労働者が集まり、労働運動の伝統を持ち込んで来た。これらの移民労働者が作成したヘブライ語のビラや中国語のビラなどもある。写真やポスター、映画フィルムなどの資料も沢山保管されている。写真では戦前のかかなり古いものまで沢山残っている。しかし、ポスターなどは戦後の50～60年代以降のものが中心で、あまり古い

ものはない。大原研究所には、戦前のポスターが沢山あるといたら、大変驚いていた。

このキール・センターでは、約2時間くらいにわたって色々な資料を見せていただき、説明を聞いた。資料整理のボックスやファイルなどについて質問したら、カタログをくれた。大変参考になる。

この後、ブレッドさんのお宅に帰る途中、コーネル大学の付属美術館に立ち寄った。この美術館は、建物全体が「ミシン」のような形をしている6階建てである。展示室は5階が最上階だが、ここからの眺めは最高だ。エレベーターから降りて、おもわず、展示品ではなく窓の外の景色に見とれてしまった。

この階には、日本の陶磁器や仏像、浮世絵などの東洋美術が展示されている。数はそれほど多くない。下の階には、アメリカ美術もある。嬉しかったのは、私がアメリカに来てから惹かれるようになったアルバート・ビーアシュタットの風景画が2点あったことだ。

しかし、ここは開館時間が5時までで、全てを見ることができなかった。見て回ったのは一時間ほどで、そのうち15分ほどは展示品ではなく外の景色を眺めていたことになる。

この日の夜、私の泊めていただいたお宅で、日本研究関係者を集めたパーティーが開かれた。20人ほどの皆さんが集まっただろうか。

私のためというより、この家の主であるブレットさんが一年ぶりに帰ってきたことを歓迎する意味でのパーティーだったようだ。こちらにいる友人の方々、日本関係の方々を紹介していただいた。

この家は、まさにパーティー向きにできてい

(9) キール・センターについて、詳しくは<http://www.ilr.cornell.edu/library/kheelcenter/default.html?page=home>を参照。

て、一階南側にはそのための広いスペースがあり、テーブルや椅子が置かれている。虫が入ってこないように、回りが網で囲まれているという用意周到さだ。

夜になって蝋燭に火をいれ、テーブルの上にお皿やコップ、プラスチックのナイフやフォークなどを並べてお客さんの到着を待つ。料理は、このお客さんがそれぞれ一品ほどを持ち寄るという形式だが、皆さん車で来られるのでカレーの入った鍋をそのまま運んできたり、混ぜご飯が山盛りになった飯台を持ち込んだりと、やり方がダイナミックだ。

薄暮の中、蝋燭の明かりがゆらゆらと揺れ、涼しい夜風が頬を撫でていく。テーブルの上には、山盛りの巻き寿司や混ぜご飯、野菜サラダなどが並び、カレーの良い匂いが鼻をくすぐる。

なるほど、これが個人宅で開かれるパーティーというものなのかと、その時思った。アメリカ

映画やドラマなどで目にし、話にも聞いていたが、実際にこちらの方が主催されるパーティーに参加するのは初めてだった。良い経験になった。

この日は、朝から歩き回り、パーティーでもアメリカの労働運動・労働問題などについて色々な方と話をした。ブレットさんのご主人もコーネル大学の教員で、中国出身の方だったので、中国の政治・経済状況についての話もした。会話に疲れたのか、後半はへたり込んで椅子に座ってしまった。

でも、盛りだくさんで疲れたとはいえ、大変有意義な一日だった。「ボストンからは遠かったけれど、来て良かったなあ」というのが、私の率直な感想である。

(以下、続く)

(いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所
教授)

OISR.ORG

Ohara Institute for Social Research, Hosei University

OISR.ORG は法政大学大原社会問題研究所の公式サイトです。OISR は研究所の英文名the Ohara Institute for Social Research の頭文字で、URLは <http://oisr.org> です。「オイサー・オルグ」とご記憶ください。

■社会・労働関係リンク集

<http://oisr.org/links/toc03.htm> または
<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/links/toc03.htm>

社会労働問題に関連するサイトを網羅した分野別リンク集です。労働組合サイトをはじめ労働運動関連リンク集として、各方面から高い評価を得ています。

主要目次：労働組合・労働関連組織（国内・国際・海外）／研究機関・研究者（国内・海外）／社会問題・社会運動／分野別リンク集（国内・海外・国際）／官庁・経営者団体等／国内の英語サイト